

第35回 Kozoom28 「人工知能(AI)技術を思う」 Part II

清水健二

前回に続いて「人工知能(AI)技術を思う」Part IIをテーマとして、芸術分野におけるAIの展開を考えてみたいと思う。デジタル技術による日常生活の省力化や効率化、AIによる教育への有力な支援の適用は有効とするが、Chat GPTの急速な世界的普及に対しては懸念される課題が多く、安易な利用は人の思考力を衰えさせかねないと前回に述べた。偽情報の流布対策や、人権侵害の防止、正確性の担保といった方策を練り、国際基準の策定と共に、日本の生活文化に見合った適用が求められるべきだと言及した。

AIの特性はインプットされた多くのデータを基に、要求された答えを素早く理性的、論理的にアウトプットできる能力を持っている。しかし感性の支配する芸術の分野における領域には、どんな答えを出してくるのかに私は関心があり、今回自分なりに想定してみようと考えた。特に私の趣味の範囲にある彫刻、絵画、写真の分野で思うところを述べてみたい。

彫刻の分野での具象彫刻は、人物や動物を対象にすることが多く、すでに3Dという技術によって対象物とそっくりの作品を高い完成度で造り上げてくれる。一例をあげると、東京の上野公園に立つ西郷隆盛氏の銅像は、彫刻の巨匠高村光雲の作品で120年も前に制作されているが、西郷さんの生前の印象などを基に創作されたものと言われている。特に風貌は堂々とし、身長3・7m



上野公園の西郷隆盛像



3Dによる西郷隆盛像

で、台座を含めると数mになり下から仰ぎ見る時に顔が小さく見えないよう意図的に頭部を大きく制作している。彫刻家が遠近法を計算し、鑑賞する人に感動を呼び起こすように配慮して制作するので、モデルを忠実に表現することは少ない。つまり作家の意図する造形美や感性を表明する事によって作品は芸術性を醸し出す。この西郷さんの銅像も様々な評価をされながらも、人々に親しまれてきている。それを3Dで制作したものがあり、そっくりな作品は容易に制作できるが、独創的な作品は3Dでの制作は難しい。しかし私は近い将来には可能になるような技術開発が実現するような気はしている。

次に絵画の分野について言えば、画家は自分の描きたい対象物をどう捉えて構成するか、表現したい色彩の好みや、筆のタッチ、或いは油彩画でのマチエール等々その画家の特徴が明確に表現される。それを鑑賞する人たちに伝えることで存在感を示し親しみと感動を与える。仮にAIを利用すると、画家の技術的特徴を覚え込ませることと、作者の作画意図を詳細に提示することにより可能と考えられる。

すでに写真の分野ではフィルムカメラからデジタルカメラに変革し、現在では100%に近くデジタル化した。10数年以上も前から「Photoshop」というアプリが開発され、画像の修正やリタッチを可能にした。これを絵画の分野に利用し、新しい画法を作り出すことに応用された。例えば私の描いた拙作「嵯峨野の竹林」をベースに変換した作品を紹介すると、私の作風と違った優れた作品を創出してくれる。私にとっては少なからず著作権を侵害されたような気持ちになるが、原画があるからこそ次の展開が可能になるので、下手な作品でも原画の著作権は保護されるべきだと思っている。



嵯峨野の竹林（油彩画）



油彩画の画風変更作

写真の分野においては、風景写真家は時季や時間帯を選び光と影を美しく表現する。ライティングなど演出することで一層効果的な作品に仕上げるものである。画家と同様、写真家も被写体を自分なりの感性で切り取って、独自の写真を創っていくものである。またイメージをプラスするため他の被写体と合成する手法を取り独自の写真を創り上げる。例えば昨年国際写真サロンで受賞された作品で、「ブツダを拝む」は仏像と信者の間に他の仏像をかすかに表現し、全体の雰囲気



審査委員特別賞 (82回) 「アツダを拝む」 Myat Zaw Hein (ミャンマー)

第83回

国際写真サロン

作り出し完成度を高めている。

もう10年も前に、私は鳥取県境港市にある水木しげる氏の妖怪ロードを訪ね、大山にも立ち寄り旅したときに撮った写真をもとにメルヘンの世界を創作した。私の拙作をご笑覧願いたい。

私は写真家ではないが、自分なりのオリジナルな作品を求めて楽しんでいる。これをAIにやらせるには、写真家は自身の特性を覚え込ませ、作者が意図する被写体を明示し、撮影のための環境条件を整備してインプットしない限りアウトプットできないと私は思う。



少女と妖怪

ところが先日新聞記事で知ったことだが、国際写真サロンで今年受賞したドイツの写真家が、その写真はAIにやらせたので受賞を辞退したという。どんなプロセスを経てAIがアウトプットしたのかわからないが、彼はAIを活用して創作したことを堂々と切り切る時代に入ってきたのかと感じている。(ファイル2を参照)

従来の芸術作品は無から有を、手作りによって生成してきたし、高度なスキルの技量を表現して評価されてきた。AIには豊かな発想を具体化した芸術作品はとて出せないと思っているが、これまでの著名な絵画や写真、彫刻や陶芸、工芸品、更に音楽など様々な分野での過去の芸術作品をAIが学習し、複数の作品を組み合わせ複合作品を産出する可能性は高いと想定される。アツと

驚くような新しい発想の作品は無理だとしても、感動的な作品を生み出す確率は高いと推測される。しかも近年多様化する芸術作品が、AIによって産出され評価され出すと、これまでの美や芸術の概念が変化して新時代へ急速に転換する気配を感じている昨今である。

AI生成「画像」世界的写真展で賞



受賞を辞退した作品「The Electrician」=ボリス・エルダグセン氏提供

ドイツのアーティストが、権威ある国際写真コンテストの受賞を辞退した。その理由は、作品が「写真」ではなく、人工知能(AI)で生成した「画像」だからだ。作品を手がけたボリス・エルダグセン氏は、主催者側がAI生成画像を受け入れる準備があるかを試すために応募したと明らかにした。

受賞した作品は「The Electrician」。起こったことのない出来事の「偽の記憶」を意味する「Pseudomnesia」という、エルダグセン氏が手がけるシリーズの一作だ。この作品が「ソニー・ワールド・フォトグラフィ・アワード」の一部門で受

辞退の独アーティスト「何が写真か議論を」

賞した。同コンテストは「世界で最も権威のある写真コンテストの一つと見なされている」とうたう。

作品には、2人の女性が写る。年配の女性が若い女性の両肩にしがみついているような構図だ。よく見ると、手の大きさや位置に違和感を覚える。主催者側は当初、受賞者としてエルダグセン氏の作品をホーム・ページに掲載したが、すでに作品は取り下げられた。

エルダグセン氏は自身のホームページで受賞を辞退したことを公表。「皆さんのうち、どれくらいの方がこれがAIが生成したものだかわかり、疑っていたりしまし

たか？」と問いかけた。

辞退の理由については「AI画像と写真は、このような賞で競い合うべきではない。それらは異なるものだ。だから、私はこの賞を受け入れない」と述べた。「写真界は、オープンな議論が必要だ。何を写真と見なすべきか、何を見なすべきでないか。私はこの賞を辞退することで、この議論を加速させることを願っている」

エルダグセン氏は日本時間21日、朝日新聞のインタビューに応じた。受賞の連絡を受けた時は「驚いた」といい、主催者側にAI生成画像であることを伝えた上で失格にしてよいとも伝えたという。ただ、結果は変わらず、受賞者の発表の際には「AIが生成したことについては言及されなかった」とふり返った。エルダグセン氏は「『AI写真』などといった誤解を招く用語を使うのをやめよう。もう一度、深く考えて。少なくともAI生成画像と呼ぼう」と訴えた。

(真田嶺)